2010年10月13日(火) 毎日新聞掲載

戦争の本当の姿は、子が親よりも先に死ぬ

命の大切さ語り残す

大阪・東淀川 瀧本邦慶さん

小中学校で体験講演

「戦争の本当の姿は、子が親よりも先に死ぬこと。自分の命を大切にしなさい」――。府内の小中学校で3年前から、自らの戦争体験を子どもたちに語りかける男性がいる。戦争当時は旧海軍の航空機整備兵。真珠湾攻撃を経験し、海軍機動部隊の主力が壊滅したミッドウェー海戦では九死に一生を得た。

大阪市東淀川区の瀧本邦慶さん(88)。古里・香川県の商業学校を出ると、海軍を志願した。17歳。「兵隊になってお国のために働く」と、小さい時から教え込まれてきた身には、何の迷いもなかった。

新兵になって待っていたのは古参兵による体罰。さいなことで、カシの棒でしりを激しく打たれる。暴行を受けるとしりは腫れあがり、あお向けに寝ることもできない。「何が生死を共にする戦友か」。あこがれて入った海軍の実態に早くも失望させられた。

1941年11月下旬、乗務する空母「飛龍」は千島列島を出港。艦長から12月8日にハワイ・真珠湾を奇襲すると伝えられた。航海は冬の荒海との戦いだった。大波に翻弄される艦内で、油まみれになりながらドラム缶から燃料タンクに重油を補充する作業を続けた。高波にさらわれた戦友もいた。たどり着いたハワイで、日本は「戦果」を上げ、太平洋戦争の口火を切ったが、「こんな大国相手に戦争が続けられるものか」とひそかに不安を抱いた。

戦争中、生死の境に立ったのは3度。

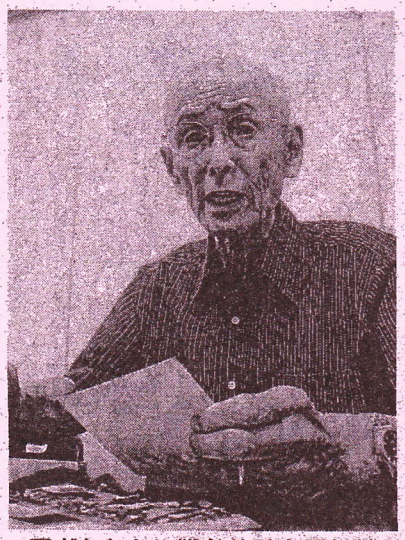
一つ目はミッドウェー海戦(42年6月)。瀧本さんは飛龍の甲板にいて、敵機の機銃掃射に襲われた。とっさに伏せたわずか数十センチの所を機銃弾がかすめた。戦闘の緊張で気付かなかったが、この時の弾が右脇に食い込んでいた。やがて、飛龍も爆撃を浴び、艦底のガソリンや爆弾が誘爆。伝声管からは艦底に閉じ込められ、蒸し焼きにされつつある戦友の悲痛な叫びが響く。「総員退艦」。命令で生き延びた兵士は駆逐艦に乗り移った。炎上しながらも飛龍は海面に浮かんでいる。「機密が多い空母をそのままにはできない。生存者が乗りこんだ駆逐艦は魚雷を発射し、飛龍を海中に葬った」。司令官と艦長は艦と運命を共にした。

傷が癒えた後、南洋のトラック島の基地に派遣された。既に制空権を失っており、連日、敵機の空襲に見舞われた。二つ目の奇跡はある日の空襲で起きた。たまたま普段逃げ込む頑丈な防空壕とは違う壕に逃げ込んだ。この時の空襲で、いつもの壕は1トン爆弾の直撃で、崩れ落ち、約20人が死亡した。

補給を完全に断たれたトラック島では、飢えと病で多数の死者を出した。フィリピン・レイテ島への転勤命令が出たのは44年5月ごろ。「とにかく抜け出たかったので、うれしかった」。約5人の転勤者は夜陰にまぎれて1人ずつ潜水艦で脱出するが、瀧本さんはその最終便にあたった。ところが、その最終便が敵の攻撃を受け、沈没したのだ。「自分はどうして不運なのか」と絶望した。だが、レイテ島では同年秋から冬の戦闘で日本兵がほぼ全滅している。「三つ目の奇跡。あの時、転勤していれば生きてなかったでしょう」

新聞などで戦争体験を語る同世代を見て、「自分も若者に語り残すべきだ」との思いを強くした。今では、年間5回前後、子どもたちに講演している。「我々の世代は死ぬことばかり教えられ、戦争で青春時代がなかった。1人でも多くの子どもたちに戦争の実態を伝えたい」と話している。

【花牟礼紀仁】



子どもたちに戦争体験を語り続けている瀧本邦慶さん
―大阪市東淀川区で

2月11日、瀧本さんの御自宅まで、お邪魔して、打ちあわせをしてきました。
「戦場のリアルな真実を生命ある限り、若い人に伝えたい。ワシにはもう時間があまりないんだ。」と瀧本さん。

参加御希望の方は、表面にメール、お電話下さい。
ぜひこの機会にたくさんの参加をお待ちしています。